大鹿スケッチ

第 51 号
2015 年
1 月
〈　発信者　〉
前志満　くみ
〈　提供　〉
旅舎 右馬允

二〇一五年の初日は雪の朝を迎えました。寒さもかなり強まり、家の中にこもって家族と団らんしたり、ゆっくりしたりするのにはちょうどいいお正月となったのではないでしょうか。穏やかな一年になりますように。

十一月下旬、知り合いが絵の個展をするというので会場になっている市内のカフェに足を運んだ。そのひとは自然観察を積極的に楽しむ人で、ここ数年、力を注いできた飯田市山本にある「ハナノキ湿地」の四季を題材にした展示だった。水彩画が並ぶ他、保全などに携わる有識者からのメッセージや刺繍の作品もあり、いろんな視点が集まった多角的な作品展だった。たまにはゆっくりしようとおもってコーヒーをオーダーし、本を開いた時だった。カフェのオーナーから紹介したい人がいるというのでカウンター席にいくと、話には聞いていた元スゴ腕行政人Tさん。専ら話題は「リニアとこれからの地方社会」について。Tさんは民族学視点も持っていて、行政人としての考えと生活者としての視点にシンクロ感があると感じていた。現在、第一線は退かれているが地域のコーディネーターを務める。阿智村清内路で興味深い取り組みをされているようだったので、これは取材にいかなくちゃ！とおもった矢先、知り合いの地質学者のM先生登場。話は週末、弁護団とおとずれる予定の大鹿村の話に…アウェーだからこそゆっくりできるのでお邪魔させていただく。

「話し合う場」のカタチを探して

信州・大鹿村から車を南に走らせること一時間三〇分。清内路（せいないじ）という集落がある。清内路は、長野県南部に位置し、北は木曽郡に接する地域で二〇〇九年に阿智村と合併している。人口約六〇〇人足らずの集落だが近年、移住者が定住し、伝統野菜の流通や、地域経済のあり方を模索する動きが著しい。「清内路振興協議会」という住民で構成される村の諮問会議があるというのでお邪魔させていただいた。

阿智村は二つの村の合併を受け入れている。清内路もその一つだが、山に囲まれた谷合の地域の中で醸された独自の生活形態や、手づくり花火など特色ある文化も残る。だからこそ清内路の考え方として「村」という自治を残すのではなく、清内路，という生活者の観察眼にこそ、その地域なら「地域」をいかに残すのかに重点ではの解決法があるのかもしれない。委を置いている。ではその地域が残るためにはどうしたらいいのか――。企業の代表中心にしていたようだが今それを住民が主体になって考え、意期は「地域のことについて考えてくれそ見を出し合える場、また実行できるうなひと」に個別に声をかけて招集した場が「清内路振興協議会」だ。　という。若い世代が彼らの親世代と同等

一二月十日夜、仕事終わりの二十に議論する様子も微笑ましかった。代～五十代の男女、二十人余り集ま　**ワクワクすることは、もっと気楽なと**った。普段は三つの班に分かれて協**ころから始まっている。**議しているがこの日はすべての班　「清内路振興協議会」はテーマに対してがそろい、これまでに話し合った内なにか答えをだしたり、活動に移すこと容を発表した。テーマは「エネルギを目的としていない。勝手気ままに話ー、食糧の自給」「地域の中で仕事し、班ごと話題の方向性も異なるが、外をつくる」でそれぞれの班が自由に部のコーディネーターTさんによって話し合いを重ねてきたという。一班抑えどころは緩やかな中にきちっとしは「リニアの工事計画を視野に入れている印象。共通しているのはテーマの地域社会について」二班は「清内共通認識だ。約五年続くこの振興協議会路の伝統野菜の内外への発信」そしは毎年人が入れ替わり継続しているもて三班は「人口減少について～地域ので現在、地域の五％の人間がこの協議を構成するひとの気質～」それぞれ会に携わったことになるという。一期目が独自の視点で話し合ってきた様からテーマは変わらず「エネルギー、食子がうかがえる。三班の発表は生活糧の自給」「地域の中で仕事をつくる」の中に感じる素朴な疑問から話し　この振興協議会を経て、個別に事業が始合いが展開したようでリアリティ　まるなど実績も上がりつつあるという。があり興味深かった。「なぜ結婚　協議会を経験したこの五％の人たちのすると家を出るのか」「昔はみんな　潜在的思考のチカラは実際、大きいと思で暮らしていた」「お姑と嫁の関係う。地域の雰囲気や特性にじわじわと影に気兼ねするからと言っているが　響しているのが外から見てとれる。活動実は問題は他にあるのでは」「みん　「みんとしての表れに「地域の遺伝子」がキラな一緒に暮らすことで生活習慣が　リと光るのだ。この「清内路振興協議会」整ったり、いい面もあるのでは」「上　は集落の規模は小さくても独自性の高清内路と下清内路の気質の違いに　い集落において可能なミニマムな「話しついて」など素通りしてしまいがち合う場のカタチ」であると感じた。地道な疑問だが、家族ベースの価値観やな取り組みの延長にしか相応しい結果住んでいる集落の気質で地域を見　はついてこない。だとしたら千人の大鹿ていくとなるほど、面白い。こうい村でも試してみる価値はありそうだ。

大鹿 HeatBeat

～大鹿の人々～　第 49 回

紙谷　正　さん　(88)

季季節ごとの風景と共に大鹿人の生活をご紹介します。淡々とした日々の中に熱く響く「鼓動」をお届けします。

一日の朝、大鹿谷で耳に届いた鳴き声はイカルというと私には聞こえる。留鳥なので年中聞かれる鳴き声ではあるが、季節や気候の温度によってその印象は変わるのだとおもった。今日受け取った印象は透明感のある清らかな不思議な鳴き声だった。

新年の挨拶回りに紙谷さんをおとずれた。にこやかに出迎えてくださり、一通り挨拶を済ませると写真を撮った。雪に光が反射してなんだかいつもより明るいお正月。こんな印象のお正月もある。

ふとした所から探していた自作のイモムシの箸置きが出てきた。昨年の夏、何回かつかっておく客様を驚かせ、一部は驚きついでに割られてしまったものもあった。自慢の作品である。母にお正月につかいましょう。といったら「いやだ」と言われた。出世魚の「ぶり」がこの辺では年取り魚で使われるのだから、成長によって姿を目まぐるしく変える彼らも「縁起昆虫」として起用されてもいいのではなかろうかと思ったのだけだ。残念ながら一般には理解され難いものなのだろう。

今年も「縁起昆虫」として一般に受けいられるようオンシーズンは彼らの魅力について解説をがんばりたい。